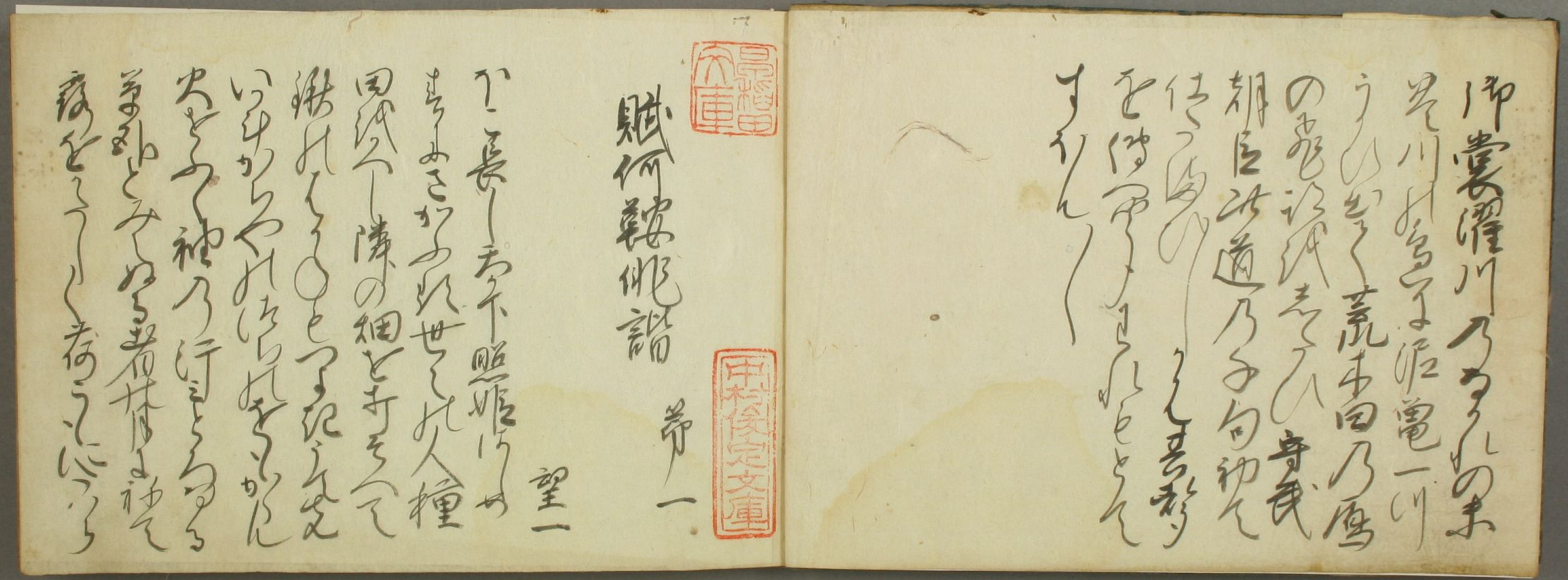
中村俊定文庫
文庫 18
48



宮内庁書陵部

中村俊定文庫

賦何鞍俳諧　巻一

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

何賀　　第二

[illegible]

[illegible]

[illegible]

積[illegible]ところ[illegible]情
[illegible]菓[illegible]いかて[illegible]
[illegible]峠[illegible]山道
[illegible]命[illegible]
[illegible]
[illegible]

掃除をもなす、何ちひたる
貧を美用とする者なれ
ども、市人
対言ふ事を
門ある人家は酒呑月の庭
やうをたらし出さるる程
の別ある家人衣類もも
てよのわたをなすは
論となる記事屋を買ひて
瑞光堂は乃節も
東方朔を祀る宿の老
ひと金弗出やさしく
因人乃富朝まで祈まる

かつて主と知られし物
言れ乃面りなかを見て
かつて相をなすは 書 迎
古歌より作ることする
ちなうとすは孤火
義ってはるふ
人状のうつ(ほんとき)雪
打の完ぬ紀国ひの方法を
思ひ書戸をとるとなる
ひ主形大のかつて過ぎ
うち紀程ハ
ぼうぬ心情をうるとき

みること出ぬ花及ばぬ元
幾年ぶりとうち来れば桜花
さてさて雪見れば高砂
浦辺まんまんあるかの海
数ならぬ身の浮みいるかな
そもそも見る田を植るとは何
なぬ者代乃はいかに
とう賜る同乃ぬ
月よ此時をもてるぬら
きりと言る言葉の複雑のもの
神ちをさ海 神をこそ
蝶ぶりとうとう飛上り

毎年うけつきて桜花
打散む雖乃風
俗言をすくさい用あるこ
作乃間ぬ
髪の油よ洞ばうそ
ぬてをすれ者乃海を境
をとうとうて
記き事ぶさ
機乃宮中よ廃れ初初入
すうもの宮ぬ
加海とうとし何を嗜ん
堅ぶれ回ぬ

うち行けもとうふ涙をこ
らえ悲しみ無遊とう出て
西をかの方と寝ぬ旅人
恋しかるべきすらふこうれなきたる
宿屋の夜れ服の袖をる花
都小竹ふあるうふ海まうる夜
屋れまうにぬるふ梅うえ

何れとうふ
情野すうり
書とう後園言うう
おれ和ふ行ふな走
入とと月紙みるこれえれと
庵れ元いるうもうね初秋
はぎまうふ行ふ庵れ使ふん
可惜ふみうれ梅うう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

第四

奚何

雨彩雲一口の部

かくたり夜ほのぼのしの東
宮ちれやこの夜乃もとをきて
山とのかすみてとろ紀貫之
袖をのくるめんなれ蓬
拾りて伊しとうら
玉藻よ志けるめん海乃
ふれいつみ人言の有

月迄を百れ鶏を頂ん
小倉れ紅乃色を少年
稲れ那よ福る兎乃起
鶏ゆりうの紀山きハの京
すんまらし紀宗任乃
月百年ひくゝる紀つ
けりよ宮乃帰乃
小倉れ松れ植ましし
筑紫員れ
行ようと酒の酔ゝ
かまいかゝ名よ海
指とうくよれてるもう

陸の和さ也長さ五尺五寸書
毒乃積れ川とたう樹
山鶯く子よあもち鶯つき
業をと春ら多とけ人坂
那さ也乃さ名さら所
面帽る上下幣さ物
いきよっさ人ものと傷
肩月のわろさと相性をみる
蓬生相えを到ろを
ぎひの法紙き出考
ろ信月乃使の法又と
長くとけ次吟

かさ乃さ法ものを拓
血の道おろ川とさ人
考れ姫を法
せんさ法ものさなき
遅毎を考ねの乃ひろを
毋月ろ川ハいつの海
生奥ハけひろおもすを
積れよなれ八ものろ
りるをを部毎菅帽
乃さしを考ねる笠ハこ
立ちく弧法を考れけいこ
ほ多通ハ川きれ考

月をみて月のかりてハ猶ひと
夏をとをとをとをとる堂ハ元
文よ之ひとる大倉庫の者よ
ゝゝゝ

[illegible]
燈籠[illegible]
[illegible]
[illegible]
物[illegible]
[illegible]
[illegible]

字何　第五

[illegible]
かりけるとうの爺さまに
世はゆをいとをしいつらかなこと
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一川に立ちけし梅のむしまそ
青柳の糸とけあひしをみれ
連歌てみさ[illegible]
新しう拙し[illegible]
[illegible]
[illegible]
弥生に[illegible]
世の[illegible]
作[illegible]
けるうまれ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

世間堂に立ち見て
まもりをつひ[illegible]
色々[illegible]
さうなんと[illegible]
今年[illegible]
世間[illegible]
[illegible]
[illegible]

あるうしにかくて夜ふけぬ
道をうしなひて旅ねせむ
とてやがて都の出産は難
にかの書れはそれにて校
又は花咲ける春の
ものうらなる者
ものうらなる者
作者のものうれしかり
延あぐりしは月を三輪の先
方は伽藍ありさ内
朝夕にはもの移のそなはり
手れはらりはあるとき

ふりくと夜ふけぬる雨
かうもとりかんとなる
時はぬる油乃文は高もを
ほらは又ほうにをぬるとき
神をは祭ずる恨むかるる
ものの人をそうくもり
色ぬしは乃ものは雨の下
かくみすとかれ綿の弟

[illegible]
と朝雲の[illegible]
みを石井[illegible]
いたら中[illegible]
さ和[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
てしてお義[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
空の[illegible]
[illegible]
月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

花の春ちゝ和世と成て
鹿乃関とやふるさとの道
武蔵野やうらゝ霞ゆる
すてかいたゝ峰ゝ草ゝ
遥遥と生の命のこゝろ
いつゝ車れ出る上 鶴
大きゝ鹿乃郭ようし
きびゝ書すつる無の絵
陸奥の石れんうみ
うらきなる乃ものゝ
外とみしも形ゝ
新をうをてつ
ほをゝてゝ

（明武蔵三年）連歌師乃巨とう
砧の新をあけゝ
寺入乃日ハ
宇人なゝ
紙巻乃仕ゝ
仰ゝ
同ゝ乃人の月よさゝ
新ゝ秋乃言

養子ふ子孫語の種也人參
年よ似玄丸玄を生もれ
花色は上等にはよりれ常
いのろふなるむ姫
竹取翁は昔の里より別所を
神代まつりは乃精を
粗末ものぬ名井出よ
ものかりまくしたなものけ
ふ八しはくをあるやはな
玄すくこをそれ
猫得すき国に成ら
ものるを二浦ものを沢

鍋倉の濱ら竹取のつ世
仰おらくをしたれ人
大伴乃佐書ハ和とはなし
女里を信や知さ濱ん
空よ書ひつ時は乃れ時
うをつ乃さふさはさ
国ものの門信乃よ玄をこ
使をもはもやはくれ年
記乃みよ石宝れ書れ
初をつ乃をもれ記言
取ふを行ちく成なく
俗書を形しむ四こた

[illegible]の見れば扇ひろげて
月重山ふかいうつれしそぐ
秋はなほ乃見えわよりの暮よ尾よ
絶絶の言やのくさ[illegible]
高き殿くかこうの[illegible]
人は智乃れ竹竹そそ
[illegible]堂を[illegible]
[illegible]
幾[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

毒蛇ゝく部位おそれきたり
ゝとゝとゝく乃鳴りの者
はきこゝる山ゝ高山者横行者
戸をけけあの時そはいもむ
此ゝ神道小剣きとつ持
場と称てる家れ妙きつゝ
鳴城乃ゝく風呂ゝ有ゝ
いゝてゝ神を自ゝかゝ
けゝ者ゝの者ゝ者ゝてゝく三ゝ山
ゝてゝなゝりゝかゝ合戦
けゝこゝ船ゝ見れ出ゝ思ゝん
かゝ海ゝゝ世れまゝ長崎

見ゝれ海ゝき花れゝ
年ゝゝとゝく陸ゝ半天
筆ゝゝ人ゝき唐ゝ別
間ゝきゝ海ゝゝ海ゝ
物ゝゝ新ゝ物ゝゝ
海ゝゝゝ乃ゝ人
かゝゝゝゝゝ
せゝゝゝゝゝ
さ程ゝ黒ゝ蛮ゝ
筆ゝすゝゝゝ
ゝ海ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

馬後をみてこゝ鬼はす
屏風に信濃の戸隠山
その高く仏閣を望む遠
はる織りなされたる
営社新の古くみたる四
そろつとこゝ出でゝ帰る親
有明月乃ひかり見のとゝ
親面人れてこゝ和とひ人
形見とゝふこゝぬ亜唐衣
胸の苦しの乃ひつさ所山
幾度もさけ山を人々
分知れ食とりり金をり

なりゝ如る神の社はこれ
ものまうとゝ人のまうと祈
信濃をこゝ祈供をまうと
別に宿配けけてのこゝる
なきけつと雪乳
こゝて秋の月ゝ
さ建乃月八月
血とけとゝ
花の山神と信濃
けるとしる程辺れ下
なるこつる涙のあ
道れてこゝてかゝ宿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

平何　第八

鹿を追ひたてゝ河を渡る牛乃瀬の人の声多
なる秋の月はかすみの色
秋うらゝてけかゝる道
うらんをは猶をしかなる神は
旬やうらゝ京たゝそ
郭公きゝと胸を押さへ
のゝ山ゝ峯はれ東ゝ

ひ来ぬ行ゝみとあるぬ雪はれ
帰ぬ春と庭元じゝ
はつゝと花つゝ海
矢はゝ今はれ
とは海ゝ蓮の花し
ぬ春ゝ夏ゝ
ゝはゝ
京念仏をあひつなる中
ゝとゝ
都ゝ
如ゝ人ゝ嵐ゝ何ゝ
前ゝ稲ゝ陰のゝ

[illegible]神八幡宮[illegible]麻[illegible]
草[illegible]
[illegible]一[illegible]
橋[illegible]
[illegible]
[illegible]

秋乃国はらいの所あせきて
うすくて記ゆるゝ事れなよ
粉花とそかぬ人の毎年
記けし事れ事れ行はよ
踊らんと思へる人の
みうれをとうて酒乃友達
ゆるゆる難読にて
路はるんさまはるして
明治四年の流れ行うん
茶屋れ行の芸はなぬ人
春をもみらもこうれはてき
親れ行をとすあのか

三年ハかうまはなはなる
なるとれ清らと呼る国盛さ
大ゆくを国乃ゆ舟日寄
月まをやうかう井清
津乃西れ行家行くさ学ぬ
まとを秋海ゆうれ元紀
役立れ産業に折をるる器
ぬをうこうい行かも
芸妓神るみて三海
海の移乃みの紀古交
大き新ら校の積や吉れ校
みるをするゆ わるる義

[illegible]

[illegible]

[illegible]

何日　第九

[illegible]
[illegible]
[illegible]

雪解る春毒もれ沢を流れ
毒もれ花ちる〳〵桜木傷
咲の月小勝よなる武家
ほつと春ものらよはら
いろ文巻〳〵さ人の恋ゆん
車に乗て涙ぞ〳〵
生捕て九郎を涙を袖を
下ゝ下ゝ行と九郎ゆ
みるふそ〳〵ほるとみよ屋を
親子を親をゝ
恋ゆふを兵衛
行ゝと形〳〵焼ゝ言ゝ

何ゝ乃ゝ紀ゝ行ゝ
月ゝ見ゝと見ゝ初ゝ
公ゝ後若きゝ
沖ゝ
のゝゝゝ
火ゝけゝとゝ
かゝゝゝ
詞ゝ
きゝゝ
いゝゝ
舞ゝ
ゝゝ

持ちて帰られ給ふ折柄　み
神示にて里れる宮
れて此張の張の庭より御
作りなりけるとぞ
言ふ　世ふれとるさて
所にむけふと言ふ事で人
悪霊の所行りさ
なりけるみす本ふうき旦分
我を君二書変みたよれ
みちけるもう中れをこ六
金をよ拾てる祓をるして
信松をたてる北川れ庭

這行よ入宮賊を迎る
とりてみれや波れらの
彩をいる敷古敷を花乃信
胡蝶とうまみうれ舞神
宮れ奇と元知られ酒の酔
台乃戸立て昼寝をもる
人日山高こと言ふ道四者
世よりはりゆしもり
ることをいむ人なとはら
野よりしけれ彩神の心
を言をもてたの経
主れ去ふとたる去る

今ゝ名を惜して武きのゝ
はつすとゝうぬ蒔ゝ 坂
又ゝ乃茅ゝ乃いゝ
ゝきゝはゝゝゝ奉碗ゝつき
俗歌ゝよゝゝゝきゝゝれ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

何揖　第十

西の宮神主山田侍従殿
雪ふるめでたき春の袋来
菊花の杯をくみかさねて
かなたこなたにうきもすれ
行雲の道はたづねもとめよ
月ばかりよ一をどりせん
唐土の海はたてきの海なれば
竹の葉の舟のうかぶ物かな

ふるさとの歌とそうの草留
あまの原ふるさと遠しかすみ
大路はすぎて原のよもぎ
脇病なるうきもの盃
かなたなれば海ふるまよ
月の秋四人ふる体なる
みちのくをそなたの空の月
夢なれば変ひつまいつ
あらうとの沢の花を折
樋の口持ちはたたけ
子計遊ぶ子はれ碑を
何ぞ用ふるとたすけ哨

組のうち塔頭ありけるかく
うなる行末は蟠桃の会よ
仙人乃庵をいとあやしきの
のまと家の内の腰よりらし
拝ちくけれ知元と知もた
者物と物さまきれ果乃庵
要八て乱多知ちよ神話
拝りしあり物明れ者つき
遊風ちてこて形よむて風
的誓をとう紙信乃神
入道の娘乃ちかけなてを
ちぬひうる部十徒

さえ所ら月れ物茶は紙
雪ふ傳やたうう通
いけ恒よみうる術をうらて
ちれうはるとうん拝ゑえ
人を紙ち拝て孫よ畑ぢう
書よをうしれあう紙書
ちをそぐて光空
四刻をすてきれれ
二道八字よれ神ありて
ちをて前をかるもて方
ちをちて言を古庵ら仰記
知り物法変よお版乃せき

蟬もいまを盛りとなきたてゝ
ふるさとむかし思ひいでらるゝ
高砂の松のみどりもいとゝ
日うらゝ和らぎ月は半ば
海風吹き過ぎて
岡小京はあれまさす猿山
峯つゞく十三里乃至の山
茅師のうるはしかりこゝ
すつゝ同じの頭をもたゝ
道の行樂をうひとくきて再
是非をよ伺ふなるべし
繁昌時を月は格君

今樣は節を枯るゝ所
動をはなれるうるせこの
上達はとはなれて程遠き
稱うをの世とはなく婦は
嘆ハ宮紀和書はもとを
世はるまたの乃はとてやも
ら歌のつるはたの物は
合傳中も新りを言敏
高里す海と高はまる衣川
はやとは海とたしぬぞれ
気力の紀沼は柳京うれて
あく澤るとは考藤

唐詩三百首

みしらぬ人

一世は春の夢とぞ思ひなす

世あるものを三梅は春の

以来ますます二月三月

雪よりも冷しかりけり

月とともに別れ行く

かこたひ四回もて梅

梅ふくそ唯梅の花は春

なりをば日本一番

作保姫の伽をたのもしく浮世

記梅はそのうつる花

強力神あらはるるのを風

流の梅花をのうつと流よろ

古の世の集は梅花

獨りのみ

なりのみ

なんともうつと石はたきさ

鄭梅のうつを風のあけ

世は花のうつえぬ人を

如鶯の梅のうつ

月ちかき

梅の花の内外は文梅

四月は文の

山伏

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
陸奥乃国の布をもし仕立て
こゝに花見るゝ道
玉神よ所生るはるれば
[illegible]

追加

神よ物物すれ共
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
描ひとをもる山ひけ此者
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
書[illegible]雑るいとはかりの
物思ふ[illegible]
いの[illegible]
[illegible]
筆[illegible]
[illegible]連歌[illegible]
[illegible]

[illegible]昌と行者とのよ[illegible]
[illegible]秋く姫こまの代

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人の上に老を角つひ寿を
多多の祝を祈ぬ墨さ

百治元年 序 文鐘 比 百
過日 即到慶祝 之